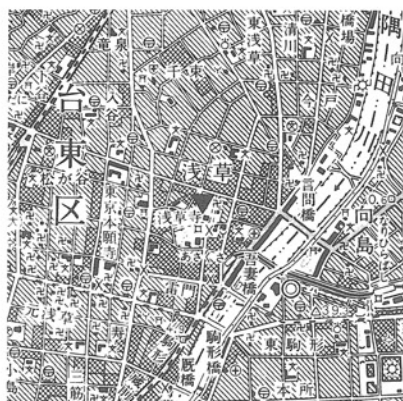


東京・浅草寺遺跡^{せんそうじ}

- 1 所在地 東京都台東区浅草二丁目
- 2 調査期間 一九九三年（平五）八月～九月
- 3 発掘機関 台東区文化財調査会
- 4 調査担当者 小俣 悟
- 5 遺跡の種類 集落跡・寺院跡
- 6 遺跡の年代 古代～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（東京東北部）

浅草寺遺跡は、武蔵野台地の東縁に広がる東京湾奥の沖積平野（東京低地）に立地し、当地東方には隅田川（旧入間川）が南流しており、隅田川の西岸には微高地（自然堤防）が南北に形成されている。その微高地が最も広がり、最高所となる地点に本遺跡が位置する。

当地には早くから浅草寺が所在している。浅草寺の縁起によれば推古天皇三六

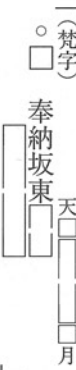


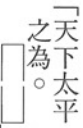
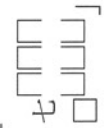
年（六二八）に起源があるが、瓦を葺く本格的伽藍が出現するのは、平安時代後期～鎌倉時代初期頃と推定される。

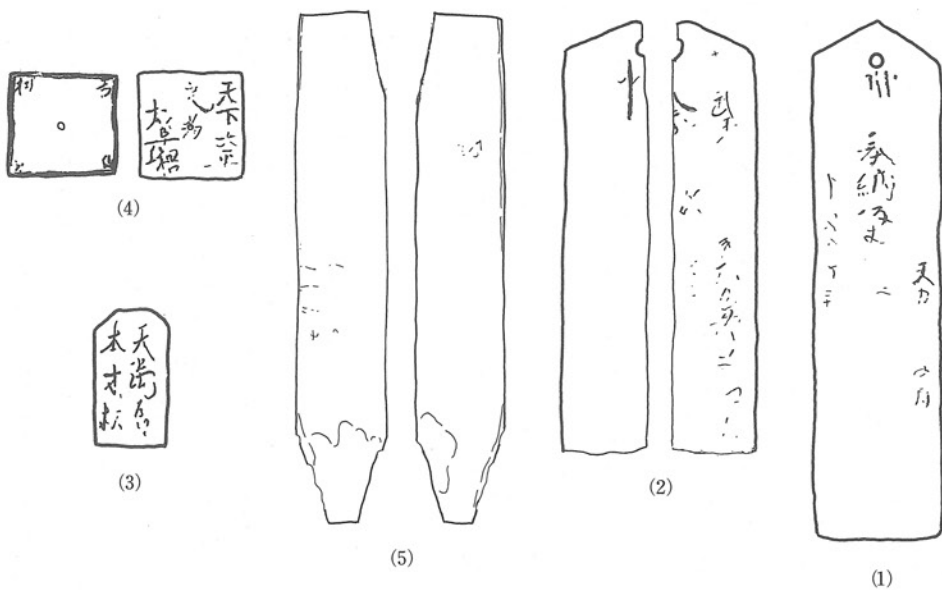
今までに本堂・五重塔再建に際し、確認・発掘調査が行なわれているが、今回は本堂西側整備工事に伴う発掘調査であり、影向堂新築地点を主に調査した。その結果、古代の溝・土坑、中世の土坑・ピット・蔵骨器埋納遺構、近世の土坑・池などが検出されている。また本堂西側には近世から池に囲まれた淡島堂が所在し、六角形の東京都有形文化財六角堂などが配されていた。

整備工事に伴い六角堂などを移動することとなり、その際六角堂の基礎の石組みを確認した。六角堂の下には「井戸」があるという伝承があるが、石組みは切石を六角形に積み、底面にも敷石されていた。その石組み基礎の中には多量の人形・針・古銭・木製品、それに木簡などが廃棄されていた。淡島堂では針供養などが行なわれたので、六角堂の出土遺物はそれに関連するものと思われる。ちなみに遺物の年代はほぼ一七世紀後半～一八世紀前半にまとまる。

なお本調査は現在整理中であり、墨書の釈文などは今後変更もあり得る。また未整理の墨書遺物もあり、本稿は今の時点で判明している状況の報告にすぎない。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 「梵字」

 奉納坂東 天 月
 158×38×2 011
- (2) 「武州カ」

 132×(25)×2 081
- (3) 「天満」

 本木 板カ
 41×21×6 022
- (4) 「天下太平之為」

 柳 仙
 32×31×3 021
- (5) 「天」

 512×(88)×9 061
- (1)は奉納札であり、坂東三三カ所巡礼用と推測される。「天」が年号とすれば、共伴遺物の年代から「天和」(一六八一〜八四年)



と思われる。ちなみに浅草寺は坂東札所第一三番目である。

(2)も奉納札であり、縦に半截され左半分は欠損している。(3)は上部を圭頭状にした木札である。(4)は方形の木札であり、中央に穿孔が見られる。裏面は縁に墨が塗られている。

(5)は板塔婆に転用された板材で、両面に墨書が見られるが、裏面とした四行分はかなり薄く、表の一字分(?)が転用後の墨書と推定される。当初の用途は不明であるが、四行分の墨書がある面が本来の表側と思われる。

9 関係文献

台東区教育委員会『台東区の遺跡』(一九九五年)

小俣悟「台東区の遺跡―概要と最近の調査について」『武蔵野』

七四―二(一九九五年)

(小俣 悟)

紫香楽宮跡調査委員会編 信楽町教育委員会発行

『宮町遺跡出土木簡概報』一 の刊行

「皇后宮職」「金光明寺」と書かれた木簡や、参河・遠江・駿河・伊豆・近江・越前などの諸国の荷札木簡が出土し、紫香楽宮跡であることが確実になった滋賀県信楽町宮町遺跡出土の木簡の概報が刊行された。今回は宮町遺跡で初めて木簡が出土した一九八六年度の第四次調査から、一九九七年度の第二次調査出土分までを収録する。既に『木簡研究』などで報告済みの木簡についても、今回再度釈読を行い、最新の成果を収録する。今後継続刊の予定。

A四版 三二頁 写真図版三葉 一九九九年一月刊行
頒価一〇〇〇円(送料込み)

問い合わせ先

信楽町教育委員会宮町遺跡調査事務所 鈴木良章氏

電話 〇七四八―八三一―一九一九(FAX兼用)